
君と一緒に生徒会っ！

雄花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と一緒に生徒会っ！

【Nコード】

N2003E

【作者名】

雄花

【あらすじ】

このお話は、ちょっと黒い主人公と、おバカでハチャメチャな生徒会長と、無口で意味不明なことをたまに呟く副会長と、天然でドジでマヌケな書記と、その他生徒役員による、バトルありの笑いあいの学園コメディー物語です。byエンル

プロローグ

「うーん、どうしようか・・・」

少女は、窓を見つめながら唸っていました。

「どうしたんです？かいちょー」

少年が少女に駆けつけ、頭を傾げました。

少女は、うーんと唸っているだけです。

「生徒会の人間が少ないなあ、と思ってねえ・・・」

「それは、当たり前ですよ。『アレ』を使える人間だなんて、そう簡単には・・・」

「でも、少ないのよー！ー！！」

少女は、よくテレビで見るちゃぶ台をひっくり返す真似をしながら、声を張り上げました。

いや、そう言われても・・・と、少年は困った顔をしています。

少女は、さほど落ち着かないのか、辺りをうろろし始めました。

「うーん、どっかに・・・どっかにいないのか・・・」

だんだん、歩く距離、スピードが速くなっています。

「どこかにいないものかー！！新しい『人材』！！」

うおおおおー！！と、少女は叫びました。

それを必死で、少年は止めに入ります。

「お、落ち着いてください！かいちょー！！」

少年の声も届かず、少女はただ暴れているだけです。

「え、えと、聞くと一年に転校生が来るとか！！」

『転校生』という言葉を強調して、少年は大声を出します。

その言葉で、少女は「しん・」と静かになりました。

「ええっー！！！！ほんとっー！？」

少女は、嬉しそうな顔を少年に近づけます。

「ハイ。本当です。」

にこつと、少年は天使のように微笑むと少女から一歩離れました。

少年の頬が微妙に、赤色に染まっていました。

「よーし！！期待してんだからねー！！転校生！！！！」

少女は、二人っきりの部屋でいないはずの『転校生』に呼びかけま

した。

「近づくな、変態」

暗い路地裏。少女が一人・・・男の人たちに囲まれていました。

三人ぐらいいるでしょうか・・・？少女も辛口で男たちに反抗しますが、男たちは聞いてくれません。

「そんなこというなよ、優ちゃん」

三人の中の一人がニヤニヤしながら、少女に近づきます。

少女は危険を感じたのか、一步下がろうとしました。だが・・・

少女の後ろはコンクリートで出来た壁です。逃げられそうにもありません。

「さあさ、オレたちと楽しいところへ・・・」

男が、肩を掴もうとしました。

「やめてよっ！！」

少女がそう叫んだとき、男の一人が気絶していました。

他の二人は、目をまん丸くして少女を見つめました。

『なにをやったんだ・・・譲ちゃん・・・』

そう、言わんばかりの表情をしていました。

「私に・・・近づかないで？お願いだから。」

笑顔で、そう少女は言いますが、二人は少女が怖くて怖くて足ががたがた震えています。

少女が怖くてしょーもないのです。

「じ、ごめんなさ・・・い」

男の一人が謝りました。一人が謝ると、もう一人も口には出しませんが頭をぺこぺこ下げています。

「じゃあ、さつさと帰れ。」

二人は涙目で、頷くと、ぴゅーとゴキブリの如くその場から立ち去りました。

少女は、二人が帰ったのを見るとぷーとため息をつきました。

「世の中腐ってんねえ・・・」

その夜は、星がくつきりと輝いて見えました。

プロローグ（後書き）

こんにちは、これからも宜しくお願いします！

作者からお願いです。

ただいまキャラ募集しています。

キャラの名前・性別・その他いろいろ・・・を書いて、感想の中な
ど、連絡フォームで作者にください！

でわ、待ってます！

その1番「天使って・・・」

気持ちのいい朝です。

私の名前は、エンル。職業は天使です。

私のこれからの仕事は・・・そう、ある人の人生をずっと見る事・・・です。

長いようですが、短い仕事なんです。こういう仕事が一番多いんです。

私は、どれくらいの人の人生を見てきたでしょうか・・・？

百歳まで生きたもの、悲しい過去を持った者、事故で急に逝ったモノ・・・

たくさんいました。たくさんいて、たくさんあって・・・

その人それぞれの、「色」がありました。

その色はとっても綺麗で、透き通っていて・・・

これから、私が見ていく人の人生はどんな「色」なのでしょう・・・？

とっても楽しみ・・・でもあり・・・切ない・・・です。

「うわああああ！！！！くるなあああ！！！！」

「いいじゃないかー、オレはお前の・・・」

「ただの兄でしょおお!!」

少女と、青年が、砂煙を出しながら凄いスピードで駆け抜けていきます。

あ・・・この女の子が私がこれから見る人ですか・・・

たしか、名前は・・・「ゆずわかゆう 柚若優」さんでしたね。

天使ノートにも書いてありますし。

で、優さんを追っているのは優さんの兄の「ゆずわかもう 柚若猛」さんですね。

・・・猛さんにとっては、愛だと思うのですが、それ嫌がらせにしか見えません・・・

ストーカーと言うものじゃないでしょうか・・・

「死ねえええ!!この、くそ兄貴iiii!!!!」

「酷いよー、兄に向かってー」

「今日から学校なの!!だから、付いてこないで!!」

「えゝ、そうなのゝ」

「そう!!イエス!!マイディー!!だから、帰れええええ!!」

イエス・・・？マイディー？何でしょう・・・その言葉は・・・可笑しい英語ですね・・・

優さんは、少し黒いみたいです。

それに、猛さんの事、嫌いみたいです。

・
その後も・・・優さんと猛さんとの、激しい戦いが続きました・・・

やっと、学校に着いた優さんは、暗い森の中に居ました。

優さんは転校生で、今日から「水鏡^{みずかがみ}高等学校」にこれから通うみたいです。

この学校の隣にある、「水島^{みずしま}男子高等学校」、さらにとりには「水葉^{すいよう}女子高等学校」があります。

全ての学校名に「水」という言葉が付いているのは、この町、「水煙^{すいえん}町」が水は豊かだからそうです。

その他にも、いろいろな説が取り上げられていますがね。

でも なぜ、優さんはこんな暗い森の中に居るのでしょうか……？

近づいて、様子を見に行っていました。

さっきまで、宙にいたのですが、地べた……つまり地面に足をつけました。

どーしたんですか、優さん。

口には出しませんが、パクパクと口を動かして伝えようと思います。

聞こえるはずないんですがね。人間には、私達の姿は見えないのです。

私が、優さんの周りで口をパクパクさせて様子を見ていると、優さんが急に笑い始めました。

「ついに捕まいたぞー！！コスプレ女ー！！」

そう言うと、私の体はガシリと、優さんの手に掴まれていました。

解こうとしたのですが、解けません。

あ……もしかして優さんって

「さっきから、私の後を付いて来て！ストーカーよ、ストーカー！」

私の姿が見えるんですか！！

私は、じたばた暴れます。

基本、天使の体は小さいものなのです。

身長は、人間で言う幼稚園の年中ぐらい・・・小さいんです。

もちろん、優さんより小さいです。

「もしかして、幼稚園生！？・・・ごめんなさい、私が悪かったです。」

優さんは、私を人間の幼稚園生と勘違いして私から手を離しました。

天使ですからねっ、人の心理ぐらい読めますよっ！

「あゝ、私が見えるんですか・・・？」

恐る、恐る聞いてみると、優さんは「はあ！？」と私を驚いた目で見ました。

言葉に出さなくとも、目で分かるものなんですネ、気持ちって。

・・・ちよっと、優さん、引いたみたいです。

「えゝと、大丈夫？頭。」

「ここ」と、優さんは、自分のおでこを人差し指で指差しました。

頭大丈夫？という意味なんでしょう。

「私、天使なんです。そして、私はあなたを見る仕事を与えられたんです。」

見えてしまったものはしょうがない。私は、自分の正体　天使だという事を彼女に話しました。

そして　自分の仕事であなたを見続けるということも。

優さんは、ぽかんと口を「お」の形に開けて、しばらく呆然としていました。

「え、えと・・・戦　物の見すぎじゃない？君。」

「だから、違いますっ！！」

「だって、天使っていうなら翼とか生えている・・・」

人間はこう、勝手にイメージするのが少し嫌いです。

なんで、どう考えたら、背中に翼があるってことになるのですか。

まったく・・・ぷう・・・

まあ・・・今回は、天使だという事を信じてもらうために・・・空を飛んでみますか。

私は、つま先で立ち、軽くジャンプをしました。

そして、イメージするのです。

自分が空を飛んでいるイメージを・・・

「う、うあ・・・飛んでるーーー!!」

優さん、さすがに驚いていますね。

腰を抜かして、びっくりしています。

「これで、信じてもらえたか？」

「うん、うん」と、優さんは首を縦に振りました。

目をぱっちり開いて、あぐりと口を開いた顔で私を見えています。

・・・私がそんなに珍しいですか？

珍しいかも・・・知れませんが。

「私は、エンル。あなたの名前は知っています。・・・優さん、これからお願いしますね？」

「は、はあ・・・」

まだ、驚いた顔をしています。

ざっ・・・今まで、私と優さんの二人だけだった静かな暗い森に、足音が聞こえました。

「独り言が多いのね。」

その少女かと思えるその声は恐ろしいほど透き通っていました。

私と、優さんの頬に汗が一筋、流れました。

「私は、槍内 潤奈。この学院の生徒会長」

嫌な予感、そして、波乱の幕開けの感じがしました・・・

その2番「嫌な予感・・・」

「そ、それはきつと・・・空耳ですよ！空耳」

優さんは、突如現れた少女 潤奈さんに笑顔を見せました。

しかし、潤奈さんのその冷たい、落ち着いた表情は変わりません。

「ねえ・・・」

潤奈さんは、優さんに近づきました。

「お願い、生徒会に入って。」

ぎゅっと、潤奈さんは優さんの手を握り締めます。

その目はきらきら輝いていて、眩しく思えました。

カチッ！

なにかのスイッチが入る音が聞こえました・・・

嫌な予感・・・私は、優さんの顔を見ました。

「嫌に決まっているでしょ？後、顔近い。触らないで、私に。」

冷たくなりましたー！！！！

もしかして、さっきのスイッチが入る音って・・・

優さんだっ たんですかー！！

黒くなりますスイッチ。ですね、これ。

「えー、そんなこと言わないでさっ、入ってよ」

さっきまでの清楚の感じがー！！！！

なくなっています！なんか、ハチャケタ感じになっています！

「嫌っていつてんでしょ、このドデカ」

優さんは、そう言つと潤奈さんを足で蹴り飛ばしました。

黒い、黒いですよ・・・優さん・・・

「ドデカって酷いなー、お願い。」

潤奈さんは、優さんの手を引っ張りました。

「っ・・・だからっ・・・触るなって言ってるだろおおお！！！！」

優さんがそういったとたん、優さんの手前の地面が深く穴が出来ていました。

潤奈さんは、これを見て危険を感じたのか、逃げていきました。

潤奈さんの顔が微妙に笑っていたのは気のせいでしょうか・・・？

「・・・優さん、もしかして」

「あ、分かった？」

優さんは、さっきまでの姿はなくなり、微笑みました。

「私さ、生まれ持ったの怪力なんだ。」

薄暗い部屋の中 さきほど、優さんに生徒会に入るよう頼んだ潤奈さんがいました。

薄暗くて、よく分かりませんが、潤奈さんの後ろには三人、人がいます。

「くっく！あの子すごい！なにあの怪力っ！」

「落ち着いてください、かいちよー」

少年が、止めに入ります。

笑顔で、潤奈さんを止めに入りますが、潤奈さんの興奮は止まらないようです。

「確かに、あの子すごいですね。潤奈さっ……!!」

もう一人の小柄な少女は、そういった途端足にカーペットを引っ掛けてしまいました。

ドダン！という音が静かな部屋に響きわたり、少女は鼻を押さえながら立ちました。

少女の隣にいる、無愛想な顔をしている少年は黙って見ているだけです。

「よし！なんとしてでも！あの子を入れさせるわよー！ー！」

潤奈さんは、大声で叫びました。

周りにいる、三人は少々苦笑いしながら潤奈さんのことを見ていました。

「で、でも、『アレ』を持っている人間は・・・」

「まあ、黙りなさい、音葉おとばこの子の怪力があれば、『能力者エスパー』がどうとか関係ないでしょ？」

「それもそうですが 彼女も困るのだと思うのですが。」

潤奈さんの、体だけ・・・時が止まりました。

音葉おとばと呼ばれた少年は、相変わらず苦笑しながら潤奈さんを見ている。
ます。

「音葉くんの言ったこともあると思うけどさ、怪力だけじゃあ和泉いずみたちには付いてこれないと思うけどな」

小柄な少女の発言で、潤奈さんの周りの空気が冷たくなります。

「もお！じゃあさっ、つけばいいじゃない！あの子に！」

「ちよっ！それは、いくらなんでも」

「会長・・・やめな」

音葉くんの止めと、今まで無口だった少年の二人が潤奈さんの計画を危険と感じたのか、説得しています。

潤奈さんの周りは、うるさくなり始めました。

「うるさいわね！やってみなきゃ判らないでしょ！？とりあいず、やるの！いい！？」

「「「会長がそういうならば」「」」

音葉くん、小柄な少女、無口な少年の声が合いました。

（会長の命令は、どんなことでも従う・・・）

この考えは・・・間違っていると思いますが

どんなことをこの四人はやるのでしょうか・・・？

どちらにしても 優さんのことですね・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2003e/>

君と一緒に生徒会っ！

2010年10月21日16時50分発行